概　要　報　告

実施期日	８月２日（水）
部 会 日	中学校　特別の教科　道徳部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『生徒が自分の気持ちや考えを伝えたくなる道徳授業
―本音を伝え合える授業の工夫―　』

提案概要

人の意見や考えに触れることは楽しい、他者の意見に触れ、自分の考えが深まり成長すると感じる生徒が多い一方で、自分の考えを相手に伝えることは苦手と感じている生徒が多い。そこで、生徒が自分の気持ちを伝え合うことが楽しいと思えるような授業実践をめざし、以下の①～⑤に取り組んだ。

①道徳教育について学ぶ機会をつくる
　講師の招聘、道徳通信の発行、教員間での指導案の共有・授業参観・振り返り
②生徒の良さを認め、自己肯定感を高める取り組み「いいところさがし」
③授業参観で学び合う
　共通の振り返りシートを使用し、毎回同じ視点で振り返り
④「聴く」「話す」「話し合う」「聴き合う」態度面の大切さを共通理解とし、安心して自分の気持ちや考えを伝えやすくなる環境づくり
⑤生徒が本音を語りたくなるような発問への工夫
　校内で話し合い、発問力の指標を次の５つにまとめ、教員間で共有。その上で授業実践。
　「本質的な問いになっているか。」「深く考える問いになっているか。」「生徒たち自身が問いを発しているか。」「問いが問いを生んでいるか。」「問いが継続しているか。」

＜授業実践例「二通の手紙」＞　※授業の工夫と、授業後の振り返り

〇授業１回目
　工夫）自分の意志を表明するための色付きカードを使用。また、生徒が話合をしやすいようにコの字型の座席で実施。発問を７つ用意。
　→中心発問が何だったのかわからなくなってしまった。また、発問が多く、一問一答のようになってしまった。

〇授業２回目
　工夫）発問を２つに絞った。また、意見交換の前に自分で考える時間をつくった。
　→生徒が考える時間が得られ、意見交換が活発になった。しかし、源さんへの対応が適切だったかの議論になってしまい「ねらい」に近づけなかった。

〇授業３回目
　工夫）ねらいに迫れるような発問を検討。生徒から様々な意見が出やすく、自分事として考えやすい発問に変更。
　→様々な立場から考えた意見が多く出た。しかし、ねらいを深めるための発問としては課題があった。

＜実践の成果＞

①発問に対して、じっくり考えたいと思う生徒が増えた。

②授業後の振り返りで、自分の気持ちや考えを書くのが止まらない生徒が見られた。
③伝えたい気持ちが止まらず、授業後に教員と意見交換をする生徒が見られた。
④授業後も、友達同士話し合い続ける様子が見られた。
＜今後の課題＞
①ねらいにせまった、生徒が深く考えられる発問をめざす
②教員がファシリテーターとなって生徒同士で意見のやり取りをするような授業展開をめざす

質疑応答

Ｑ１：発問は、各クラスの授業において統一されたのか。加えて、各担任による違いは許容されたのか。

Ａ１：今回の提案は、昨年度実践したもので、ローテーション道徳として行ったもの。例えば、１つの題材を１人の教員が当該学年のすべてのクラスにおいて実施した。その為、同じ題材で担任の違いが出るということはない。しかし、授業を、クラスをかえて実践していく中で授業者が発問や展開を変えていくことはあった。

Ｑ２：『許せないよね』において、匿名の人がいることに注目させることが大事だと思うがどうか。

Ａ２：とても大切なことと思うが、今回の実践では、自由・責任を内容項目とし、生徒の実態をふまえ、自分がどう考えたかに注目させる発問とした。

協議の柱及び協議概要

主体的・対話的で深い学びを目指すために、

●どのようなねらい？
　教材の特性をいかすために、「ねらい」をどのように立てるか？

●本音を語りたくなる発問とは？
　子どもたちが本音で語りたくなるように、「発問」をどのように工夫するか？

まとめ概要

　提案者は、若い先生方の道徳授業に対する悩みに向き合いながら、学校組織全体として道徳教育の推進を図った。なぜ、発問が大事なのか、どんな発問が大切なのか、ご自身が感覚的に実践してきたことを言語化しながら、教職員どうしが具体的な言葉を介して共有できるよう取り組んだ。

　提案者が大切にした「本音を伝え合える」ことは、現行の学習指導要領で求められている「社会に開かれた教育課程」の実現のためにも大切な視点である。学校教育が、社会の常識とは別のところに独立して、授業の中のみで道徳的な「こうすべき」に終始することなく、教室の中でも色々な考えに出会って、生徒それぞれが自分自身をみつめることができる、そんな道徳授業をめざされていた。一方、本音を言わない子、言いたくない子の視点も大切に、どうしたら伝えやすくなるだろうかと子どもの状況に向き合い、安心感のある学級風土づくりも実践されていた。

　今後に向けては、学校組織全体として「居場所づくり」「絆づくり」を意識した道徳教育が進められるとよい。教育活動の中で起きる子ども同士の対立場面を学びの場ととらえ、教師もかかわって助言しながら、子どもたち自身に考えさせ、子どもが実際の解決の糸口を見つけ解決を図る。このような取組の中で、子ども同士の絆を作っていく。それが「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度」を育てることにつながる。

　加えて、道徳教育が教育活動全体を通して実践されるためには、目指す方向性について考え、議論できる教師集団が大切である。そんな集団づくりの中核を担ってほしいと願っている。